

全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

15

■ 第3章「制御不能」

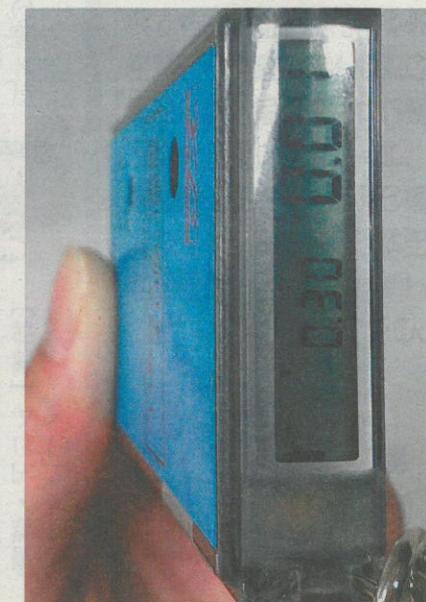
ア版 14年(平成26年)6月2日(月曜日)

3月13日早朝、福島第1原発3、4号機中央制御室の補機操作員林崎悟(24)は3号機の原子炉建屋地下にベント弁の開閉状況の確認に向かつたが、高温の圧力抑制室上に足を置いた途端、靴底が溶けた。抑制室上を5歩ほど歩けば弁の確認ができるが、その5歩が果てしなく遠かつた。滑った感じでした。普段なら何とこない距離ですが、これほど高温の場所で転んだらどうなるんだどう怖くなりました」

「足を置いた瞬間、靴がぬるつと滑った感じでした。普段なら何とこない距離ですが、これほど高温の場所で転んだらどうなるんだどう怖くなりました」

抑制室の熱は本来、冷却能力の高い残留熱除去系(RHR)と呼ばれる海水を利用した装置で取り除け

両親に宛てた遺書



福島第1原発で使われているのと同じ型の警報付き線量計。単位はリモで、警報の設定値④と被ばく線量

本当にごめんなさい

付き線量計(APD)を手に取った。暗くて手元がよく見えない。デジタル表示される数値がみるみるうちに上がっていく。

3秒ごとに10倍以上昇している。そここしまつた。

制御室の線量がそんな早さで上がるはずがない。1時間に換算すると12時間だ。

お父さん、お母さん、親孝行もできずに死ぬことを許してください。

地震後、せめて一度いいから声だけでも聞きたかった。

「A.P.D.の数値が変です」。林崎はすぐに当直長に報告した。

「故障じゃないのか」。当直長は家もきっと大変な目に遭うと思ひ言つた。だが他のA.P.D.も数値が上がりしていた。3号機で応急溶融が進んでいた。

3号機原子炉建屋内では、格納容器でいることは疑いようもなかつと共に制御室に戻つた。

3号機原子炉建屋内では、格納容器でいることは疑いようもなかつ器べントをするため配管にポンベをた。

自分は最後まで生きるのをあきら接続して圧縮空気で作動する弁を開ける試みが続いていた。

真っ暗な制御室内には三十数人がめなかつた。きっと死ぬのは自分た
いだ。「もう助からない、帰れない」。けじやないんだけどもしそれでも、
林崎はこの時点で初めて死を意識し、この手紙だけになつていた本当に

れていた。林崎は持つていた手帳からペーパー(敬称略。年齢、肩書きは当時)を一枚ちぎると、そこにはあつたホーリーベンで両親に宛てた手紙を書き始

|| 第3章おわり